



新入園児の取り扱い

—ある幼稚園の新入園児母の会の話から—

多田鉄雄

来る四月の入園式までまだ二週間もあるのに、今日お集りねがったのは、これから二年、三年または一年とつづく幼稚園生活の初めに当って、ご注意申し上げるべきことをよくお話ししたいし、またご質問に応じて十分にお話し合いおき、お子さまの幼稚園生活の第一日から、みなさまならびに私どもの十分な留意のもとで営まれるようにしたいからであります。

* * *

幼稚園時期の教育が人生において極めて大切なことはいうまでもありませんが、幼稚園におけるお子さまの教育はみなさんの協力があつて初めて効果を現わすものであることをまづ忘れないようにしていただきたい。もしご両親乃至ご家庭の協力がなければ、たとえ幼稚園が必死に努力しても所期の三〇%も効果をあげ得ないのであります。たとえば「ハイ」

と返事するしつけを幼稚園でいくら懸命になつても、ご家庭で放任されているのでは、いつまでたつてもそれはお子さまの習慣にまではなつていけません。

* * *

お子さまは一般に楽しく張り切って通園してまいります。しかし入園前の環境とは全く異なり、先生、友だち、あそびなどあまりにも新しいかざかずの環境がとりまいていて、お子さまの心は極めて緊張させられ、刺激も非常に強く受けます。それゆえにそれまでとはちがつて大きな疲労をうけるのが当然でありますから、外見上はお子さまが楽しそうに見えても、しばしば幼稚園生活はお子さまにとって過労になつていきます。それですからことに入園後一か月ほどはお子さまが幼稚園から帰つて来たときは、とくに心を配つてやさしくいたわつてやるとともに、十分の疲労回復を心して、午

睡・睡眠・休息を適当にさせていたただかないと、ある場合には病気になる、ある場合には幼稚園が嫌いになる一原因となります。

* * *

幼稚園はおめかしを見せびらかしにくいところではなく、自由にのびのびとお子さまが生活するところです。スタイル、布地が良くても、運動に不都合だったり、お子さまの身体をしぼったりするような衣服は避けて下さい。お子さまが遊んでいるうちについてよごしてしまつて悪いような衣服は幼稚園へは着せてよこさないで下さい。通園着は運動に便利で、そして丈夫で清潔なものということが必要にして大切な要件であります。幼稚園へいって暗れ着をよごしたり、破いて来たといつて叱る親があれば、それはお子さまの成育を殺すものであります。

* * *

お子さまは幼稚園にはいるまでは、しばしば間食とか起床就眠などが、ご家庭の都合その他で不規則になっている場合が少なくありません。幼稚園の間接的な意義の一つはお子さまの規則的生活の確立を助長することにあります。登園・下園・中食・間食の時刻がおのずから一定してきます。幼稚園で遊ぶことが一定の運動をしていることでもあります。ご家庭においてはこれにかんがみ、早起き・早寝の習慣のほか、

お子さまの規則的生活に留意して、健康な身体をつくりあげていくことに努力していただきたいのであります。

それと関連して薄着の方向を目指しながら、寒さ暑さに適応してただちに着衣を増減することに心がけてほしいのであります。冬という季節だから、周囲が冬支度しているから、厚く着るのでなく、この寒さだからこの程度の衣服を、というように着せて下さい。

* * *

できるかぎりひまを見てお子さまの様子を参観に来て下さい。エプロン姿の買物の途中でもかまいません。お子さまがどのように遊んでおり、他のお子さまとくらべてどんな長所と短所をもっているかが、次第によく分つてきます。それとともにできるだけ、先生とお子さまのことについて知らせ合い、話し合うことです。参観が全く許されていない場合、また参観する暇をもてないご両親はとくにこの話し合いを重視することです。先生はお子さまについて気づかなかつたところを教えられ、ご両親は先生から教えられます。幼稚園時期には一般のPTA方式よりも、このような両者の連絡がとくに重要であります。このようにしてはじめて俗にいう「親バカ」の主観的判断から脱却していくことができるのです。

先生と話し合いをするのが母親だった場合、家に帰ってから父親とそれについてさらに話し合うでしょう。それと関連

して、単に先生との話し合い、または先生に対する批判のみでなく、一般に子どもには聞かせない方がよいおとなの話がたくさんあります。これはよく気づかずにして、後でとんでもない結果を生みます。十分に気をつけていただきたい。

*

*

「はえば立ち、立てば歩きの親心」といいますが、ご両親の中にはお子さまへの成育が待ちかねるのか、または欲がでるのか、無暗に教え込もうとしたり、また幼稚園にそれを期待する向きがありますが、これは全く間違っています。この時期の教育は、字が読めたり書けたり、算数ができたり、たくさんに詰め込まれてものを覚えたりするのが主目標ではなくて、そんなことより、もっとも大切なおことがあるのです。ここではそれを説明している時間はありませんが、文部省「幼稚園教育要領」(定編八冊)は幼稚園教育の目標と内容が要領よく書かれていますからご一読をおすすめします。一言にしていえば、幼児に必要な生活経験を適当な方法と環境の下で与えていくことを通して、幼児にふさわしい知的・情緒的・社会的発達をはかっていくことであります。たとえば幼児が思いのままに遊んでいて、先生は何もせずじただかたわらでこれを見ている場面が、幼稚園ではよくできてきます。しかしこれは幼児を放任しているものでもなければ、危険と悪い遊びだけを警戒している、いわば子守りの見まもりでもなくて、

先生はここでも大切な教育に従事しているのであり、ある場合には極めて周到に用意された教育場面でさえあるのです。

*

*

この節はひとりっ子、または兄弟と年齢が相当ひらいている子というのが以前に比べて多くなっています。このような幼児にとくに共通に見られる特徴は一方ではわがままであり、他方ではいじけであります。これはご両親の手がかかりすぎている結果であります。その手のかけ方があやまっているために、結果的には放任と干渉になっているのです。禁止も含めて命令ということの濫用の非は、もとより避けたいことです。しかし幼児には幼児の世界があるにしても、これを社会化していかねばならぬ以上、お子さまと相談するとうう好ましい方法だけによるわけにはいかず、どうしても命令しなければならぬ場合があります。その命令が泣き落して中絶したり、命令が濫発されるためにお子さまが不感症になった場合、わがままがはびこります。またお子さまがせっかく自分の手でしようとするのを無理に手を貸されたり、曲りに仕上げようと努力しているのに、急がされたり、矯正されたりすると、お子さまは無気力になり、何に対しても自信を喪失してしまおうし、自分から企てようと意欲しなくなるし、いじけてしまうのです。「三つ叱って七つほめ」云々の言葉はこの意味で味わい深いものであります。同時にご両親はほめ

るとき、叱るとき自分が教育者の立場にあることを自覚してほしいのです。ほめるのはいわば奨励ですから、その行動の過程でなされるのがもっとも効果的とされてますが、それはそれとして、感情で叱るに至っては、それは叱るのではなく怒っているだけのことであります。アンデルセンの絵のない絵本の中の少女が鶏に對した描写は、おとなの眼で子どもの氣持をくみあやまったことを教えています。教育者としての立場からお子さまに接する場合には、冷静に忍耐強く、換言すれば親として接するよりも、お子さまに對して一歩だけ距離をはなしていくべきであることをお考え下さい。

* * *

最後にご家庭では日々が随分と忙がしいところもあって、なかなか困難なこともありましようが、ぜひお進めしたいのは、たとえば夕食事などにゆっくり落ちついてお子さまにその日のできごとを話させることです。この場合に聞き手が親切で、しかもお子さまの言葉に興味深く耳をかたむける態度でほしいのであります。お子さまは訴えたいこともありましようし、自慢したいこともありましよう。おもしろかったできごとを思い出して楽しみたいこともありましよう。これに對して身を入れて相づちを打ってやることは、お子さまの兩親に對する信頼感をいかに増すか知れません。それは同時にお子さまの心の安らいでもあるのです。

ある場合にはしてはならないこと、しては危険なことを、お子さまは善悪の判断なしに、または危険を予知できないで、して来たこともありましよう。それをやさしく説明してやり、さとしてやることのできるのは、その一日じゅうお子さまを見守っていたと同じ効果があります。またくどくならぬ程度で、お子さまの報告の表現の仕方をより上手になるように指導もしてやりましよう。これが言葉の教育でもあるのです。話しの内容が短かくても、不正確でも、短氣を起さずにだんだんに内容が正確に豊富になるように漸進させていきましよう。これは注意力、記憶力の訓練でもあります。たとえば、はつきりしなかった場合では「明日よく見て来てまた話して頂戴」といった工合に。ここではさらにお子さまの氣持・感情・興味・思想などを理解するという大事な任務が兩親に課せられています。これが成功し、これが習慣化していけば、お子さまが次第に成長していつてのちも、親子間の相互理解が保たれて、「親には自分の氣持はわからない」と断ずるようなことなく、大事なことは兩親に打ち明けて相談するという好ましい親子関係が確立する土台ともなるのであります。

* * *